

WCRP

6

2024
June

No. 536

World Conference of Religions for Peace Japan



アジア宗教者平和会議（ACRP）執行委員会の参加者（スリランカ・コロンボ）

こころの扉——「AI社会における宗教と意識の拡張」 加藤大志	2
ムニブ・ユナンWCRP国際名誉会長による パレスチナ情勢に対する緊急アピール	3
アジア宗教者平和会議（ACRP）執行委員会の開催	4～5
人身売買禁止ネットワーク（JNATIP） 『子どもを含む性的搾取の実態 搾取をなくすための迅速な行動を』 実施	6
日本での生活の始まりの場所から広がるネットワーク 「シリア・アフガニスタン学生リユニオン・デイ」開催	6
平和研究所 第1・2回研究会	7
『平和のための宗教 対話と協力16』を発刊	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「AI 社会における宗教と意識の拡張」

現代社会は生成AIの台頭をきっかけに目まぐるしいスピードで変化を続けております。変化の中で、大量に情報が溢れる今、現代人が1日に触れる情報量は江戸時代の約一年分と言われおります。凄まじい情報量から短期的な判断を迫られ、その結果、今を生き抜くことに必要不可欠な短期思考へと陥れることへと繋がっていき、我々は時間軸における意識の比重のバランスを失い続けているように思えます。短期的な思考のもと、今を生き

WCRP日本委員会
青年部副幹事
服部天神宮禰宜

加藤大志



ることに囚われた結果として、日々生きることがこころを失うことにつながっていく、現代の社会ではそんな人が多くなってきたように感じております。

しかし、我々は人知を超えた世界を畏れ敬う長い時間軸の中に身を置き、日々の営みの中で無意識にその感性を持ち続けていました。私が奉仕する服部天神宮には樹齢三百年以上の樟というご神木がそびえ立っています。三

月になると、徐々に葉が赤く染まり始めて、今まで樟を守り続けた葉っぱが境内にゆらゆらと落ちていきます。私たちは朝のお務めとして、落ち葉をかき集めながら、境内を元の状態へ整えていきます。落ち葉を掃除する営みは、今だけでなく、過去から変わらず続いている日本文化であります。掃除という営みは、日々継続することで、長い時間存在するご神木に意識を向けるきっかけとなり、ご神木と自らの存在との間につながりを感じるようになっていきます。何百年と続く悠久の歴史において、季節の移り変わりとともに、葉が次世代の養分として落ちていく営みは、人間が生きる一生よりはるか長い時間存在しております。この掃除を通じて、自らの存在が広大な時間軸の中にあることを意識し、人知を超えたはたらくが存在する世界に対する畏敬の気持ちを取り戻すのです。

資本主義社会では効率化が求められ、目先の利益に囚われてしまい、人類が生きる上で本質的に重要である目に見えない存在とのつながりを考慮することに欠け、目に見える世界を至上としてしまっているように思えます。気候変動など地球規模の社会課題に直面する中で、人類が短期的思考から地球と共存を希望する長期思考へと意識を向けていくには、長い時間軸の中で数多の祖先の智慧が集積するバトンを受け継いできたあらゆる宗教が連帯し、力を発揮することが今こそ求められていると強く感じております。

ムニブ・ユナン WCRPP 国際名誉会長による パレスチナ情勢に対する緊急アピール

2月に開催された第2回東京平和円卓会議に参加したムニブ・ユナン博士（WCRPP 国際名誉会長、ヨルダン・聖地福音ルーテル教会名誉主教）が5月初旬に来日し、現在のパレスチナとイスラエルの情勢に対する危惧を表明し、緊急アピールを行った。自身がパレスチナ人であるユナン博士は、

(1)現在のパレスチナとイスラエルの危機的な状況、(2)この状況に対する宗教者の役割、(3)日本が貢献できることの3点についてアピールした。

(1)現在のパレスチナとイスラエルの危機的な状況について

ガザ地区では非常に多くの人間の命が無



残に奪われている。神が創られた人間をいとも簡単に殺すような状況を受け入れることができない。また、ガザ地区では燃料や食料が圧倒的に不足しており、多くの人々の生活が脅かされている。西側諸国の国々に対しては、彼らの二重基準（ダブルスタンダード）と偽善性を問いたい。第二次世界大戦の終結後、戦争の惨害を終わらせ、世界の平和と安全を維持するという目的のもとで国際連合憲章が起草され、国際連合が立ち上げられた。その後、人権と自由を尊重し確保するために、あらゆる国と人々が達成すべき共通の基準としての世界人権宣言が採択されている。しかし、西側諸国はガザ地区が置かれている状況に対して沈黙を貫いている。人権とは西側諸国だけのものなのか？この状況の解決を求める声が、ほとんど聞こえてこない。

ガザ地区への戦闘は武器製造を促進しており、武器製造と武器売買による軍需産業は各国のGDPの上昇をもたらしている。しかし、武器は人々を殺戮するための道具である。広島や長崎での原爆投下による惨禍を経験した日本は、どのような武器に対しても反対しなければならない。

(2)この状況に対する宗教者の役割

あらゆる宗教や伝統は、人間の尊厳、人

権、人間性を擁護している。人間は神の似姿として創造され、そこには多様な人間が存在する。これを決して忘れてはならない。このような神の教えに背く行為に対しては、断固反対しなければならない。また宗教間対話に従事する人々は、いまずぐこの戦争の停止を訴え、人道支援を派遣しなければならぬ。声を上げずにいれば、近い将来、この世界が過激主義に陥るといことを心から危惧している。武器製造に反対し、平和的手段によってより調和がもたらされることを、宗教者は声を上げて主張しなければならない。

(3)日本が貢献できること

日本は平和的アプローチを積極的に推進することができる。パレスチナ・イスラエル情勢の平和的解決に向けて交渉を行うよう、日本の宗教者は日本政府に声をあげ、提言してほしい。さまざまな国は多くのお金を武器製造に費やすものの、貧困解決や人権擁護などの平和のためにはお金を費やさない。この考え方は非常に病的な考え方だ。武器は人を殺すものであり、正義のためにあるのではない。日本人は今こそ声を上げなければいけない。Religions for Peace に集う諸宗教者と協力して、どうかこの情勢を一刻も早く終わらせてほしい。

アジア宗教者平和会議（ACRRP）

執行委員会の開催

2026年第10回ACRRP大会は

シンガポールで開催決定！



5月28日～30日、ACRRPはスリランカ・コロンボにて2024年執行委員会を開催した。この執行委員会は、アジア・太平洋地域の22カ国の宗教ネットワークの代表者が集い、活動について振り返り、今後の計画について話し合うもの。ACRRPに関する宗教者ら約60人が出席した。スリランカは、2009年まで約26年にわたる内戦によって民族、宗教間の対立・分断が生じ、2年前からは経済危機に直面している。こうした厳しい状況にあつて、ACRRPスリランカ委員会は、和解放活動や人道支援、社会的結合を強化するための人々の信頼情勢の取り組みを行っている。本年の執行委員会は、こうしたスリランカ委員会の活動をACRRPがさらに後押しをし、スリランカ委員会の多様な取り組みを現地で学ぶ機会

を得ることを目的に開催した。

執行委員会の冒頭、WCRP/RfP国際委員会のフランシス・クリア・カゲマ事務総長がオンラインで挨拶し、平和の持続性確保のためには宗教者の役割が不可欠であり、WCRPはそれぞれの現場レベルで実践的にその役割を果たしていくと述べ、アジア地域におけるACRRP活動への期待を表明した。続いてACRRPのデスモンド・カーヒル実務議長はヒンズー教の祈りを紹介しながら、アジアのみならず、世界において戦争が蔓延る現代において宗教が実践する和解放活動の重要性を語った。またスリランカ委員会のコタピティア・ラフーラ会長が歓迎挨拶を行った。アジア全域から平和のためにスリランカを訪れたACRRPの執行委員に対して歓迎の意を表し、昨年からスリランカ委員会が事業と組織強化のために、新たな指導体制による活動を開始したことを報告、今後のスリランカ委員会の活動の展望を示した。

執行委員会では、2023年活動・決算報告と2024年事業計画と予算案について話し合われた。報告を行った篠原祥哲事務総長は、2023年はコロナ禍が収束しつつある中で、ACRRP活動が非常に活発になった年であったと語った。そして、現在ACRRPが重要視している計画として、2021年の第9回ACRRP東京大会で採

択した6つの行動からなる5年間のアクション・プランについて説明した。アクション・プランとは、フラッグシッププロジェクトの実施、効果的なパートナーシップの構築、ジェンダー平等の推進、諸宗教教育の実践、国内委員会の強化、財政基盤のさらなる拡充の6つである。篠原事務総長は、このアクション・プランが順調に実行されていると報告した。そして、フラッグシッププロジェクトは、これまでに気候変動対策、人身取引防止、平和構築、青年リーダー開発など8つの事業が展開され、その財源としてWCRP日本委員会が2021年に第9回ACRRP大会で表明した3000万円のうち、約1400万円が執行されたことを報告。この事業によって多くの困難に直面している人々に対する支援が実施され、ACRRPの国内委員会の強化がなされたと成果を語った。さらに、篠原事務総長が強調したのは、ACRRPとユニセフとの合同事業である「子ども、家族、コミュニティのための宗教と前向きな行動変容事業」(FPCC)である。この事業は、インド、パキスタン、バングラディッシュ、スリランカ、ネパールという5つの国において、国際機関であるユニセフと共に、宗教コミュニティを活用して子供や女性への暴力をなくすためのコミュニケーションレベルでの教育と意識啓発の推進という行動である。



これによって実際に現地における暴力対策の事業が展開され、パートナーシップ開発やファンドレイズに大きな成果を得ることができたと言説した。

また、執行委員会では2026年に予定されている第10回ACRP大会について、概要、テーマ、開催国、代表者選出プロセスなどについて話し合われた。特に開催国に関して、ACRPは正式にシンガポールでの開催を決定した。主な理由としては、大会開催にあたり同国における諸宗教ネットワークの協力やシンガポール政府からの支援を見込めること、アジア各国からの交通アクセスがよいこと、さらにはACRP創設の発端となった50年前の1976年の第1回ACRP大会の開催地であり、50周年にあたる第10回大会という記念大会の開催地として歴史的な意義を見出せることである。他の候補地としてパキスタンと日本が立候補した。日本は前回2021年の第9回大会は東京で開催されたものの、コロナ禍でオンライン開催であったため海外からの直接参加が

かなわなかったため、今回も候補国として立候補したが、当初より、どの国も開催国として立候補がない場合のバックアップの候補国として日本は提案していた。パキスタンは、同国の執行委員によってパキスタンでの開催を熱心に訴えたが、最終的に執行委員の投票によって、シンガポールが開催国として決定した。

アジア・トラステイズの始動

執行委員会の期間中、初めてアジア・トラステイズの会合が開催された。同トラステイズは、ACRPの財的基盤を強化する役割を目的に2021年第9回ACRP東京大会において設置されたACRPの機関である。現在このトラステイズには5人のメンバーがおり、そのうち4人が出席した。会合では、ACRPのプロジェクトへの寄付金を呼びかける行動やトラステイズのメンバーシップ制度の確立などが話し合われた。そして、今後は1000米ドルを年会費としたトラステイズメンバーの増加をめざすこととなった。

パブリック平和フォーラム

執行委員会終了後、ACRPはスリランカ委員会と共にコロombo市内のバンダナイケ記念国際会議場において「経済的エンパワーメントを通じて平和を達成するため



の宗教の役割」とのテーマでパブリック平和フォーラムを開催した。このフォーラムには、スリランカ政府のバンデューラ・グナワルダナ運輸・高速道路・マスメディ

ア大臣をはじめ40カ国以上の宗教指導者が参加した。ここでは、昨今の世界の経済格差の拡大やスリランカの貧困率の増大についての報告があり、それに対する宗教者の行動について意見交換がなされた。「信仰は、貪欲さや財を無制限に所有しようとする欲望に抵抗しなければならぬ」「宗教者は富を適正に分かち合うことの精神的な責任があり、そのことを教育を通して多くの人々の良心に訴える必要がある」などの意見があった。そしてフォーラムの最後に、ガザをはじめとする全ての戦争の即時停止を求めるACRP声明文を発表し、終了した。

今後、WCRP日本委員会は、東京にACRP事務局があることから、アジアや世界の課題解決に向けてアジアの宗教者と連帯し幅広く行動を共にしていく。

人身売買禁止ネットワーク(JNATIP)『子どもを含む性的搾取の実態 搾取をなくするための迅速な行動を』実施

4月17日、WCRP日本委員会が運営委員を務めている人身売買禁止ネットワーク(JNATIP)主催の院内集会在衆議院第一議員会館で行われ、会場とオンライン併せて約80人が参加した。今回は3人が報告をし、途中9人の議員による挨拶もなされた。

初めに、秦地浩未氏(一般社団法人ゾエ・ジャパン)より、『性と人権・子どもを性搾取から守る』と題した報告がなされた。秦地氏は、性的搾取の被害者らは、性的な脅迫や周囲に性被害を知られることへの恐怖心を覚えることで初めて自分の性と尊厳の関係に気づくと語った。子どもを「加害者・被害者」にしないための規制が緊急課題と強調。教育を通じて性被害に対する認識の歪みを正すことが重要であり、自分と相手の気持ちを大切にすることが重要であるとまとめた。



報告者の3人

次いで、金尻カズナ氏(特定非営利活動法人ぱっぷす理事長)より、『ホスト商法からAV出演被害、海外出稼ぎまで』と題した発表がなされた。ホストクラブ商法は、相手の

恋愛感情を利用して高額な飲食代を請求する悪質商法で、被害事例では、未成年の女性がホストクラブに連れて行かれ、性的な行為を強要されるケースが目立つと述べた。さらに、AV出演被害も深刻であり、被害者が自らの性的画像記録を取り戻すための法的措置が求められていると語った。

坂本新氏(特定非営利活動法人レスキュー・ハブ理事長)より、『歌舞伎町に立つ女性たちの支援を続けて』と題した発題では、路上に立つ女性の増加や若年化が指摘された。その背景には家庭内の問題や経済的困難があることが挙げられた。「問題解決のマニュアルはない」とし、行政機関と民間支援団体が連携し、真に機能する協働体制の構築が必要とされていると強調した。

日本での生活の始まりの場所から広がるネットワーク「シリア・アフガン・スタン学生リユニオン・デイ」開催

3月28日、日本語学校に在籍・卒業するシリア・アフガン・スタン学生を対象とした「シリア・アフガン・スタン学生リユニオン・デイ」が開催された。

これは、パスウェイズ・ジャパンが日本に受け入れた学生たちが集い、自分を振り返り、他の学生や社会の様々な人々とのネットワークを築き、今後のキャリアについて考えるために、毎年3月に開催しているもの。

2017年にシリアの学生の受け入れを開始した時から難民留学生受け入れ事業に携



就職・進学のグループに分かれてのセッション

ることから、参加者にとっては日本での生活の始まりとなった場所に戻る「ホームカミングデー」のような雰囲気集いとなったようである。

プログラムの後半で、これまで学生の受け入れと日本での生活に際して、協力してきた受け入れコミュニティの方々から招かれ、学生の卒業・進学・就職を祝うレセプションが開催された。イスラームのラマダンであったため、日没後最初の食事となる「イフタール」を参加者全員で中東料理を囲み、それぞれ久しぶりの再会の時を楽しんだ。



応援のメッセージを伝える
応援特別会員

WCRP日本委員会からは、旧難民問題タスクフォース運営委員であった菅野史生特別会員(扶桑教管長)が学生達に応援のメッセージを送った。

平和研究所 第1回研究会

金子昭所員

平和研究所の第1回研究会が4月22日、オンラインで開催され、金子昭所員（天理大学おやさと研究所教授）が『AI倫理と宗教について考える——人間とコンピュータの新たな関係——』をテーマに発表した。

金子所員は、人工知能の活用指針などにかかわるAI倫理については「まだ模索中」としながらも、宗教界（者）の問題関心の焦点を①AIをいかに教化育成や布教伝導に用いることができるか②進化したAIは宗教者にとって代わり得るのか③カルト教団がAIを悪用しないか④AIが神仏のようになってしまわないか——の四つに集約した。

さらにAIの現実と進化の可能性として、「AIが人間の知能を大幅に凌駕していく中で、人間は人間の意見よりもAIの意見を信頼するようになる。そうすると、絶対神の信仰体系としての『宗教』はなくなるかもしれないが、その代わりに帰依の対象が従来の宗教の神仏でも人間でもなく、AIが神となる『AI教』が出現する可能性もあり得ない話ではない」と懸念を示した。

また、AIと安全保障の問題として、2023年11月に「AIの責任ある軍事利用

と自律性に関する政治宣言」が米国主導で宣言され、日本を含む52カ国が支持表明。

24年3月には欧州連合（EU）で世界初の包括的な「AI規制法」が成立。同月には国連総会で「AIの開発や利用に関する決議案」が採択されたことを紹介。高リスクのAIシステムに課せられる厳格な義務について、危機感を持って取り組んでいる様を解説した。

そして、「AIの時代において、人間性を再考する哲学的人間学、そしてそれに基づく倫理的なあり方、こうしたことを教理から基礎づけることが諸宗教の役割ではないだろうか」と述べた。

平和研究所 第2回研究会

神谷昌道 外部招請講師

平和研究所の第2回研究会が5月20日、オンラインで開催され、外部招請講師として神谷昌道アジア宗教者平和会議（ACRP）シニアアドバイザーが『国家主権から人民主権へ——新たな地球社会の構築に向けて』と題して発表した。

神谷氏は、平和と戦争の概念について解説しながら、17世紀以降、国際社会がどのようなに戦争違法化を試みたか、さらに国連創設を期して制度化された紛争処理メカニズムについて詳述した。また、国際立憲主義に基づく新たな世界秩序が構築されつつ

あることに触れながら、国家主権という概念を超えて、人民主権という概念に関心が払われつつある現状について論じた。

この中で、主権国家中心による国際社会が形成された経緯について、「17世紀のヨーロッパで繰り広げられた30年戦争（1618年～1648年）の結果、ヨーロッパはカトリックによる支配から解放され、新たな秩序が構築された。つまり、宗教権威に基づく国際関係が過去のものになったことが要因」と語った。そして、「19世紀まで戦争は正当で合法的な手段だったが、兵器の近代化と戦争犠牲者の拡大が戦争に対する否定的な思考を増幅させたことにより、戦争違法化のプロセスが始まった」と述べた。

また、「現在の国連システムの重要な原則の一つに『集団安全保障体制の堅持』があるが、個々の国家が戦争という手段でその国の平和と安全を求めてきた歴史に終止符を打ち、国連という枠内で集団的に世界の平和と安全を確保しようと努めている」と語った。しかし、国連が超国家的な組織でないため、「一般国際法上の制度（習慣国際法）としては、いまだ認められていないとは言い難い」と指摘。そして現在、「国家の安全保障」から「人間の安全保障」へと視点が移り、新たな地球社会の平和を創造するための主体は国家権力だけではなく、市民社会の構成員が何らかの形で貢献しようという機運が高まっていると述べた。

『平和のための宗教 対話と協力16』を発売

平和研究所から『平和のための宗教対話と協力』の第16号が発刊された。今号には、特集として『宗教はコロナ後の共生社会をどう目指すか』をテーマに開催した2021年度平和大学講座と、平和研究所員及び外部招聘講師1名による2021年度の研究報告を掲載している。

当年度の研究テーマは、『未来の地域社会の平和を目指して ―あらゆる分断をのりこえる―』。本誌に収録された研究報告は多彩で、現代において、宗教に基づく平和の

実現、他者への慈しみの実践の手がかりを求めたものである。(A5版・220ページ・頒価800円)

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し、新しい熟語を作ります。

蛙響 (ケケケケ・ゲロゲロ)

まわりを田んぼと畑に囲まれた自宅では、今年もいたるところから蛙の鳴き声が聞こえてきます。こちらの蛙の声にこちらの蛙が応え、呼応し響きあっているようです。眠れなくなるほどの大音量なのに、なぜか心地よいシンフォニーです。

WCRPの活動

《6月》

- 4日 第48回理事会(東京・神社本庁)
- 10日 気候危機タスクフォース「いのちの森地権者との懇談会」(埼玉・所沢)
- 13日 青年部会語り&第1回幹事会(東京)

立正佼成会図書館視聴覚ホール)

- 19日 第28回評議員会(京都・立正佼成会京都教会)

21日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備(埼玉・所沢)

21日 日本パグウォッシュ会議 第1回公開講座(共催・オンライン)

25日 平和研究所第3回所員会議・研究会

29～30日 和解の教育タスクフォース第3期「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」第1回(神奈川・立正佼成会横浜教会他)

30日 和解の教育タスクフォース第1回会合(神奈川・立正佼成会横浜教会/オンライン併用)

3日 人身売買禁止タスクフォース第1回会合

9～10日 平和のためのAI倫理国際会合(広島・国際会議場他)

27日 人身売買禁止タスクフォース学習会(東京・大本東京本部)

掲載内容の無断転載を禁ず。

頒価一〇〇円一年分一、〇〇〇円(送料共)

(賛助会員の購読料については、
会費に含まれている。)

